



バンコクから北へ車を飛ばす。空港を過ぎ、野菜・果物の卸売市場を過ぎ、外資系企業の工場群を過ぎ、1時間ほど走ってようやく道の両側に見渡す限りの水田が広がる。これらの水田のなかに近年はマンゴーなどの果樹園が目立つ。バンコクに住むちょっとした金持ちが週末を過ごすための果樹園付き別荘である。さらに1時間ほど走ると大きな水路を渡る。チャオプラヤーデルタの喉元、チャイナートからデルタ東縁を流れてきた灌漑用水路である。両側は、デルタの一本の木もないべったりした水田から、立木の目立つ少し荒れた感じの天水田に変わる。チェンマイへ向かう国道1号線から東へ折れると道は徐々に高度を増していく。セメント工場を過ぎ左手にダム湖を眺めると、道はいよいよ急坂にさしかかる。荷台を木枠で作ったおんぼろトラックが黒煙をもうもうと吐きながらずり落ちそうなスピードで登っている。よくしたものでここだけは道が片側2車線となっており、難なく追い越し煙責めから逃れる。バンコクから3時間、ようやく急坂も終わった瞬間、目の前にどこまでも続く地面のうねりが見える。東北タイである。

6年近く前、私はこのルートで初めて東北タイに向かった。コンケン県のドンデー村で行われていた調査に参加するためである。ドンデー村はこの峠からさらに車で4時間、東北タイの中心都市であるコンケン市の東南約20kmに位置する天水田水稲作村である。この村は故水野浩一教授が1960年代に、1981年と1983年には福井捷朗教授を中心とする学際的なチームが臨地調査を行なった。

我々は、村のちょっとしたまな一軒の家を借りて住んでいた。高床式の家ではあるが、階下もブロック

ドンデー村の三人姉妹

河野 泰之*

で囲い床にはセメントが塗ってある。ここに長い机と腰掛けがあり、昼間は作業机に、食事時には食卓となる。調査に参加している研究者が、少ない時でも数人、多い時には十人近く、さらに調査を手伝ってくれているコンケン大学の学生や村のおじいさん連中等々、食事時は大騒ぎである。この食事を作ってくれるのが「おねえさん」である。ドンデー村の外務大臣を自認するおじいさんの娘だが、コンケン市に住む中国系の技師と結婚している。旦那がサウジアラビアに出稼ぎに行っている間、子供をおばあちゃんに預け、我々の大所帯のおかみさんに変身である。この人は抜群に頭がいい。日本語もすぐ憶えるし、こちらの性格や感情をつかむのも素早い。気持ちにひねくれたところがなく、いつもまわりを愉快にする。村に入った直後は、私にとって彼女こそタイ語の先生であり、村の人々への案内人であった。

「おねえさん」には3人の部下がいた。こんな大所帯の家事一切を一人でできるわけがない。ノーイ、レック、トイ（いずれも仮称）という。当時それぞれ20歳、18歳、16歳で、3人とも村の娘である。ノーイはちょっとお姉さんぶったところがある。まだ若いのに時に分別臭いことを言う。でもふとした拍子にみせる翳のある表情はなかなかセクシーだ。レックは肝玉かあさん。色気なんかみじんも無い。下ねたの冗談も豪快に笑い飛ばす。仕事を一番てきぱきとこなすのはこの娘だ。トイは天真爛漫。分別臭いことも何にもわかっていない。仕事なんかはっぼりだして我々とだべっているのが大好きだ。時にかからかったりすると、翌日必ず言い返してくる。この三人は決して実の姉妹ではないのだが、なぜか三人ともお姉さん役、妹役がびったりはまっている。

1984年1月、半年間の調査を終え私は村を離れた。それから5年近くたった1988年7月、再びドンデー村を訪れる機会があった。実はこの間にも2回、村を訪れている。3人はそれぞれ25歳、23歳、21歳

* Yasuyuki Kono, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

になった。我々の調査の手伝いをしてくれるまで恐らくほとんどの時間を村の人との付き合いで過ごしてきた三人の娘さんが、突然の闖入者である我々との接触を経た後、どんな人生を送っていたのだろうか。

ノイには、実は我々が村に滞在しているときから恋人がいた。彼は隣村の青年でオートバイを持っている。オートバイを自慢気に脇に止め、村の近くの池の畔にたたずむ二人を見かけたことがある。村の結婚適齢期を過ぎようとしている彼女も結婚が近いとなぜか胸をなでおろしたものである。ところがどんな原因があったのかは定かでないが二人は別れ、彼は自分の村の娘さんと結婚してしまった。そしてノイはコンケン市へ働きに出た。知合いの小さな駄菓子屋の店番である。住込みだが給料はあまり多くなく、食事とちょっとしたおこづかいに消えてしまうという。コンケンに行った時、彼女を食事に誘った。夜の八時までは店番をしないとイケない。それで食事をする店を教えて我々は店で待つことにした。八時過ぎに彼女はうれしそうな顔をして飛んで来た。仕事が終わった後、どこかへ遊びに行くなんてことはめったにしないそうだ。分別臭いところが消え、どこか子供っぽくなったような気がした。お金のことを考えたらもう少しいい職場があるのかも知れない。村を出て、たとえ村から1時間とはいえ周りほとんど見ず知らずの町に来ているのである。もう一步踏み込んで町に住むメリットを享受しても良さそうなものなのに、彼女はそうしようしない。村に安住の地があれば、きっと彼女はそちらを選ぶのだろう。

レックは、我々が調査を終えた後、それほど時をおかずに村の青年と結婚した。村に滞在している間に恋人がいるなどと聞いたこともなかったので、おそらく親がアレンジした結婚に素直に従ったのであろう。すぐに子供ができ、今や立派なお母さんである。私の目の前で赤ちゃんにおっぱいをあげるのも平気だ。日々、田んぼやキャッサバ畑で汗を流している。唐がらしの水やりも怠らないだろう。ほかの二人がふらふらして村にいつかないので、村に行くといつでも彼女に他の二人の消息を聞くことになる。情報通でもある。ちょっと聞きにくい村人の内部事情でも彼女にかかれればお笑いである。こうい

う人がいる限り、村の頼りない男どもの手綱をぎゅっと引き締めて、居心地のよい村を守っていつくられるにちがいない。

トイは三人の中で一番活動的だ。まずバンコクに働きに出た。実は同じ時期にトイの実のお姉さんもバンコクに行っている。二人が同じ職場で働いていたのかどうかは定かでない。数カ月後、トイはバンコクから戻ってきた。どこか子供らしさを失い元気もなくなった感じがした。単に少しずつ精神的に大人になってきたということかも知れないが、なんとなくバンコクのことはこちらから聞きづらかった。しばらく村に居た後、今度はコンケンに働きに出た。自動車販売店の店番である。なかなかきれいなオフィスである。エアコンもきいている。こんなよい仕事はどうして見つかったのか不思議だが知合いが紹介してくれたとしか教えてくれない。トイはノイと違って町が大好きである。恐らく時々ディスコに行ったりしていたのだろう。そして陸軍の兵隊さんと知り合った。こんなことはつゆ知らず、昨年村に行った時にトイが結婚したと突然教えられた。この兵隊さんと結婚し、今はバンコクの郊外に住んでいるという。彼女の望み通りの人生を歩んでいるようにもみえるが、今はどんな暮しをしているのだろうか。お世辞にもしっかりしているとは言えなかった彼女も少しは処世術を身につけたのだろうか。村で、トイがもし村に遊びに帰ってきたらバンコクのオフィスに一度遊びに来るように伝言してくれと頼んだが、彼女は今のところ来ていない。

三者三様の人生である。我々が調査で村に滞在したことよりも、田舎をも巻き込んだ経済発展やそれに伴う首都と地方間の人や物の交流という現在のタイという国がおかれている時代の潮流こそ、彼女達の人生に最も大きな影響を与えているようにみえる。田舎の村の娘さん達がバンコクやコンケンで、容易にはないにしろ、職を見つけられる状況と、村の中でそれなりに楽しく暮らしていける状況が並立している。それぞれが自分にあった場を見つけて生きていってほしいと、何もしてあげることはできないが思っている。

(京都大学東南アジア研究センター助手)